

# エディトリアル

東京ベイ・浦安市川医療センター 副管理者 木下順二

医療へのアクセスが困難な人たちに協力するという点で、開発途上国での医療協力活動と、へき地医療には強い共通性がある。当誌においても途上国支援に関係する記事が何度か掲載されている。

2012年10月号のインタビュー記事では、自治医科大学在学中より開発途上国で活動し、義務年限終了後もUNICEFを通じてソマリアなどで世界的な活躍を続けている國井 修医師が登場した。インタビューの中でも「日本のへき地においても国際協力に通じることはたくさんあり、私が栗山村で学んだことの中には、今国際協力に使えていることがたくさんあります」と述べているほか、著書「国家救援医・私は破綻国家の医師になった」でも栃木県栗山村(現 日光市)の診療所での経験について記している。

2012年11月号では、ザンビアで巡回診療と公衆衛生活動をしている山元香代子医師の活躍が紹介され、今月号ではインタビュー記事も掲載された。2014年5月号では福地貴彦医師からケニア無料診療キャンプ体験記が投稿された。また2014年9月号にインタビュー記事が掲載された尾身 茂医師(独立行政法人地域医療機能推進機構JCHO理事長)は長くWHOに勤め西太平洋地域事務局長として活躍された。2014年11月号にインタビュー記事が掲載された北村 聖医師(東京大学大学院医学系研究科医学教育国際研究センター教授)もアフガニスタン、ラオス、モンゴルなどでの医学教育システム作りに関与された経験を語っている。

当誌の読者、協会の会員、職員の中にも、学生時代にバックパッカーとして開発途上国を巡った方や、国際的な医療協力に興味を持ちいつかは国際貢献をと志す方も少なくないのではないだろうか。今特集では7名の執筆者からそれぞれの立場での開発途上国での医療協力活動を紹介していただく。どのようにしてその活動に興味を持ちその道に進んだのか、活動においてのやりがいと楽しみ・困難な点、同様な道へ進むことに興味を持つ方へのアドバイス、地域医療やへき地医療に活かすつなげるメッセージといったことを記していただいた。

最初の4本の記事は独立行政法人国際協力機構JICAにより行われている技術協力専門家、国際緊急援助隊員、青年海外協力隊員としての活動を取り上げた。政治的背景に関係

する苦勞、被災地ならではの工夫、環境や文化の違いを乗り越えての日常生活など、いずれの著者の経験も非常に興味深い。5本目は長崎大学熱帯医学研究所に所属してベトナムで小児感染症に関する研究を行った活動を取り上げた。義務年限終了後のキャリアとして熱帯医学を志した経緯を楽しくご紹介いただいた。著者のうち荒堀憲二医師、瀬戸弘和薬剤師、戸田はるか看護師は当協会の運営する医療施設の現職員、木下貴子薬剤師、吉野 弘医師は元職員である。身近な方々の活動を知ることで、遠い国の話と思っていた国際協力をもっと身近なこととして感じることはできないのではないだろうか。

へき地医療についてもそうであるように、途上国への医療協力に関しても継続可能 sustainableであるということは非常に重要である。国連やWHO、JICAなどの政府系機関を通じた活動のほかに、民間ベースでの活動に継続性を持たせるためにはどうしたらよいただろうか。6本目の記事ではさくら診療所 理事長/NPO法人TICO 代表 吉田 修医師から同法人の活動のほか、国際協力に興味を持つ研修医を育てる取り組みについてご紹介いただいた。

最後の著者であるDr. Noriyuki Murakamiは、アメリカ国籍を持つ日本人で、大学生時代にボランティア活動平和部隊Peace Corpsの隊員としてアフリカ マラウイ共和国の田舎町コタコタNkhotakotaで活動していたのが縁で、以来我が家の友人である。医師となった現在ではニューヨークにあるモンテフィオーレ病院のソーシャルメディシン研修プログラムにおいて、グローバルヘルスの専任講師として、後輩医学生・研修医の指導にあたっている。ウガンダ共和国キソロ県での活動をご紹介いただく中で、日本では馴染みの薄いソーシャルメディシンの考え方についても記していただいた。多くの方にお読みいただくため翻訳を添えた。初めて聞く解放医学Liberation Medicineという概念は大変衝撃的であった。アメリカという医療リソースを大量消費している国において、真逆の思想で活動している方々がいることに感銘を覚えた。

各記事にはそれぞれの著者の熱い思いが込められている。文体も著者の個性と考え、敢えて統一せず掲載することにした。さあ、世界に飛び出そう。